

【研究ノート】

嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解(六)

黄色瑞華

凡例

- 一 本稿は、嘉永版『俳諧一茶発句集』(所収句八二三、他に俳諧歌一八)の全注解である。
- 一 一行めに『一茶発句集』所収句をおく。ただし、漢字はおおむね現行字体とした。また、仮名づかいなどの明らかな誤りは、右傍に( )に入れて注した。
- 一 二行め以下に㊦として、初出及び他書に所収の有無を書名によって記した。
- 一 句形等に嘉永版『一茶発句集』と異なるものがある場合、▽以下にそれを示した。
- 一 語注は、簡略を旨とし、必要最小限にとどめた。
- 一 各句の解釈は、大意を記す程度にとどめ、批評・鑑賞も必要最小限とした。
- 一 注釈史上、看過しがたい諸注は、▼以下に記した。ただし、その著者名及び書名は、初出においてのみフルネームを記し、以下は「勝峯『名句評釈』」のように略記した。詳しくは稿末の「参考文献」を参照されたい。

## 一茶発句集

## 夏の部(承前)

不忍地

螢火や呼らぬ亀は膳先へ

㊤ 文政版発句集

▽ 七番日記(文化15・4)・座五「手元迄」。

解 遠く螢火を目に膳につく。螢はなかなか近寄って来ないのだが、呼びもしない亀がのそのそと膳の前に姿をあらわした、の意。

きれわらぢ螢とならば墨田川

㊤ 文政版発句集

▽ 座五「隅田川」。文化句帳(5・4)、上五・中七「古わらぢ螢(と)ならば」。希杖本句集、上五・中七「古わらぢ螢とならば」。

解 捨てかねていた「切れ草鞋」だが、螢の飛びかう隅田川に捨てよう、の意。

夕月や大はだぬいでかたつぶり

㊦ 七番日記(文化10・6)・志多良・句稿消息・文政版発句集

▽ 某あて書簡(文政4・6・13付)、上五「坂口や」。

解 夕月が昇り、涼風のたちはじめるところ、蝸牛は諸肌をぬぐようなかっこうで、その殻から身を出している、の意。

▼ 川島『新釈』に、「たつぷりと打水した庭に、ほのかに夕月のさしのぼる頃、一日の早魃に縮こんで居た蝸牛が、ニヨツキリと角を立て、グーイと胸の奥?まで露して、垣の湿りなどを這って行く姿」。

我袖を親とたのむか逃ぼたる

㊦ 梅塵本八番日記(文政2)

▽ 風間本八番日記(文政3・6)、中七以下「草と思ふかはふ螢」。

解 向うから童児の螢狩りの声が聞こえてくる。その方に気をやっていると、ついつと螢が一つ袖に入ってきた。

里俗かたつむりをでいろといふ

此雨の降にどつちへでいろかな

㊦ 文政句帳(文政7・夏)・たねおろし・発句鈔追加

▽ 文政句帳・発句鈔追加、前書なし。たねおろし、前書「郷談に蝸牛<sup>デスロ(ルビママ)</sup>」。

解 降り続く梅雨の時期、蝸牛が一つ、家の中に這い込んで来た。この雨の中、どこへ出て行けといふのか、蝸牛よ、の意。

朝やけがよろこばしいか蝸牛

㊦ 文化句帳(文化2・5)

▽ 稿本発句題叢、上五「夕やけが」。発句鈔追加、上五「朝やけの」。  
 解 夜来の雨もあがり、明るい朝焼けのもとで、蝸牛はによきつと角を立てている。その蝸牛に向っての対話である。

柴の戸や錠の替りにかたつぶり

㊤ 随齋筆記(文化12・夏)・文政版発句集

▽ 七番日記(文化12・5)、上五「柴門や」。句稿消息、上五「かくれ家や」。

注 『去来抄』(先師評)に、「此木戸や錠のさゝれて冬の月」(其角)。

解 このあばら家では、戸口に付ける錠などはないが、その代りに蝸牛が一つ這い付いている、の意。『去来抄』にある其角の句が念頭にあったと見てよからう。

かたつぶりそろく登れ不二の山

㊤ 文政版発句集

▽ 文政句帳(文政6・10)、中七以下「ともぐ不二へ上る也」。同(8・4)、中七以下「氣永に不<sub>(マ)</sub>士<sub>(マ)</sub>へ上る也」。

解 蝸牛よ、お前が富士山頂をきわめるのは至難のことだが、それでも氣長にゆっくりと登るがよい、の意。自戒の意もある。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「誇張して表出することも亦一茶の句法の一特色である。(中略)しかもこの句で、『富士の山』は単に誇張といふばかりでない。あの『そろく』と動く行先は実に、はるかな思ひがする。それは空間的によりは時間的である。その時間的の、遙かさを更に空間的に引戻して、そろりくと行先を遠き富士の山に置いたので、誇張以外にそのはるかさの感じをよく打出してあることを味ひたい」。

なかくに安堵がほなり羽抜鳥

㊤ 七番日記(文化11・5)・文政版発句集

解 羽抜け鳥はいたいたしいものと思いがちだが、その実はどうして「なかなか安堵顔」をしているよ、の意。

六月や月夜見かけて煤払

㊤ 八番日記(文政2・2、閏4||重出)・文政版発句集・発句鈔追加

解 雪国の煤払いは、多く夏期に行なう。畳・筵などは野外に出して干し、竹竿などでたたくのだが、家族総出で行なっても、日のあるうちにはなかなか終らない。

小金原

母馬が番して吞す清水かな

㊤ 八番日記(文政2・6)・おらが春・稿本発句題叢・文政版発句集・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 八番日記、前書なし。希杖本句集、前書、「小金原にて」。

注 「小金原」、千葉県東葛飾郡にあった官牧地。『寛政三年紀行』三月二十九日の章にも。

解 清水を飲む子馬の背後に、母馬らしい一頭が立っている。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「この前書通りの途上所見の句であらう。小馬が先に立って、母馬が後から行く図はよく見かけることである。(中略)原中に清水を見つけた仔馬は、さつそくそこへ足を止めて、おいしさうに水を飲む。足場がいかにも危い。それを母馬がぢつと見やっっている様が物こそ言はぬが、その目には母性愛が充ち満ちてゐる」。

山里は馬にかけるも清水かな

人來たら蛙になれよ冷し瓜

㊤ 八番日記(文政2・4)

▽ 七番日記(文化10・5)、中七「馬の浴るも」。同(11・5)、中七「馬に投つける」。

解 江戸市中では飲料水でさえ買わなければならぬのに、これは、馬を洗うにも清水、の意。

㊤ 志多良・句稿消息・稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽ 志多良・句稿消息、「蛙」に「カヘル」とルビ。七番日記(文化10・6)、中七「蛙となれよ」。

解 もしも、人が通ったら蛙になれよ。小川に漬けた冷し瓜。小川の深い所などに漬けて、冷してある真桑瓜である。『七番日記』に「〔我〕庵や小川をかりて冷し瓜」(文化12・6)。

▼ 川島『新釈』に、「こゝでは青く縞の入った真桑瓜などのぼかん／＼と浮いて居る様が、どうやら本物の蛙を連想させたのであらう。浅ら井にでも放り込んである様と見たい。『人が来たら取られない先に蛙になつて了へよ』と、これから瓜をむいて喰はうと思ふ楽しい気分で、瓜に向つて軽くほゝゑみかけて居る」。勝峯『名句評釈』に、「我庵や小川をかりて冷し瓜」(文化十二年)とある様に、人通ある小川の深い処へ青い縞入の真桑瓜でも冷したのであらう。ちやうど蛙でもぼかんと水に浮いてゐる様に瓜はぶかぶかしてゐる。折角のものを人にとられては残念だ。もし人が来たら蛙に化けて人に取られぬ様にせよと、ちやうど蛙への連想から、かう口の中に戯言を言つて、やがてつめたい薄甘い液汁と快い歯ざかりを楽しみ期待してゐる所である。暉峻『名句の鑑賞』に、「ある吝嗇な男が、錢を地に隠しいけて、人が見たら蛙になれと言つたら、それを聞いてゐた男が、錢を掘り出して代りに蛙をいけておいたといふ小話があります。ここもその小話によつたので、真桑瓜を手桶の中か、或は又清水の湧く所に冷しておいて、用足しに立ち去らうとする時、戯れに『人が来たら蛙になつてしまへ』とはほゑみかけてゐるのです」。加藤『秀句』に、「真桑瓜についた青と白の縞目は殿様蛙を連想させるところがあつて、ちよつと冷し瓜から離れるとき、『人が来たら蛙になるんだぞ』と言いきかせるところが、まさに子供の世界といえよう。しかし、どこか孤独な心がうかがわれて、ものがなしいひびきが感ぜられる。つまり瓜にこういうつばきを洩らすのは、人間の世界では心の交流が閉ざされているからであらう」。

初瓜を引とらまいて寝た子かな

㊤ 八番日記(文政2・2)・おらが春

▽ おらが春、中七「引とらまへて」。

解 待望の初瓜を与えられたこの子は、しばらくはしゃぎまわっていたが、やがてその初瓜をしっかりとだきかかえて眠ってしまった。一茶はその寝顔に人間本来の、あるべき姿を見たのである。

▼ 川島『新釈』に、「引とらまへて」といふ一つ踏ん張った力強い言葉を持つて来て、瓜を抱えて寝た子の姿態、健康な子供の紅い頬べたまで彷彿させる。初瓜―初真桑であらう―をよろこんで、さんざ弄んだ果にその瓜を抱えて寝て了つたと云へば、その子の背景をなす生活状態も略々見当がつく。『引とらまへて』は、同時に、子供の境遇を語つて居る語でもある。斯ういふところに方言或は俗言の抜きさしならぬ用途がある。いつも細心な洗練の結果とは云へ、用語の選択については、作者は確かに恵まれた天分を持つて居る」。勝峯『評釈おらが春』に、「大きな手鞠を枕の格好に延べた大ききなので、一茶の愛し子のさと女、正月に雑煮膳を据ゑて祝つた、あのさと女のやうな幼な児に、その初瓜をあてがへば、悦んで這つて行き、撫まへようとすると、小さい手を這つて転げて廻る。喜びながら笑ひながら、転げる瓜を追つて漸く撫まへたのである。だが、その時は這ひ疲れたと見えて、瓜を枕に、或はその瓜を一心に抱へたまゝ、それなり静かにおとなしいので覗くと、他愛もなく寝入つてゐた写真である」。川島『おらが春新解』に、「幼児には一とかかえある真桑瓜は、菓子など乏しかった昔の農家の子供の珍重したものであった。但し、この子はまだ幼くて、食べられるものという意識がはつきりせず、ただよろこんで、その初真桑を相手に遊んでいるうちに、いつか、しっかり抱きこんだまま眠ってしまったのであろう。ごろつとした真桑瓜と対照的な、健康で野性的な子の寝顔、『引とらまへて』という俗語に、その子の生活環境もうかがえる。季節的に言つても、これはさと女の実態と見ても無理のない句である」。

三日月とひとつ並や冷し瓜

㊤ 梅塵本八番日記(文政2)

解 水をはった桶の中、あるいは小川の深い所などで、真桑瓜が冷してある。その真桑瓜と一つ所に三日月がうつっている。

あさら井や小魚と遊ぶ心太

㊤ 稿本発句題叢・発句抄追加

▽ 希杖本句集、上五「山水や」。同、中七「小魚と騒ぐ」(別案)。全集本発句篇、中七「小魚と遊ぶ」と誤る。  
解 浅ら井にところてんが冷してある。そのところてんのそばに泳ぎまわる小魚を見つけたのである。

旅人や山にこしかけて心天

㊤ 七番日記(文化10・5)・志多良・句稿消息・文政版発句集

解 峠の茶屋であろう。旅人は汗をふきふき冷えたところてんに一息つく。

無限欲有限命

此風に不足いふなり夏ざしき

㊤ おらが春・文政版発句集

▽ 八番日記(文政2・4)、上五「此風の」。

解 青畳を敷きつめた広い座敷に、涼やかな風が吹き込んでいる。人はそれでもなお十分とは言わない。欲には限りがないのである。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「句の意味はあけ広げた夏の座敷に、そよくと風が吹き入る。それにも拘らず、まだその風が足



らぬといつて不足をいふ。勿体ないことだといふこと。『に』は反対の心をあらはす助詞でこれだけ風があるのに、それにも拘らず、といふ程の働きを持つ。勝峯『評釈おらが春』に、閉めても光線の透る、明り障子も今は用がないから引き払った。風筋を妨げる襖は取外してある。野から山から来る風はどこへ、どこからでも気まゝに吹き抜けられるのだ。これだけ吹いて、これだけ吹かれるれば、風にも部屋構にも不平はない筈なのに、吹きたりないの、生ぬるい風だのと小言をいふ。慾にめくゝりがない。(中略) —この人慾をたしなめるのは、第三者と見ずとも、一茶の主観的な反語だとしてもよい」。川島『おらが春新解』に、「からりとした夏座敷に遠慮なく手足を伸しながら、この風の涼しさ、こころよき、この上まだ不足があるというのか、限りある命で、欲には限りのないものだ」と自問自答しているようである」。

旅やせをめでたがるなり夏座敷

㊦ 文政句帳(文政7・11、8・6 重出)・文政版発句集

解 旅から帰った人を囲んでのひととき、元気でもどってきたことを喜び合う。

まつかげや扇でまねく千両雨

㊦ 文政版発句集

解 夏の強い日差しに閉口していると、ぱらぱらと夕立ちが来た、もっと降れ、もう少し降ってくれと扇を使う。

手にとれば歩行たくなる扇かな

㊦ 七番日記(文化15・4、12 重出)・文政版発句集

解 気に入りの扇。この扇を手にするとなぜか落着かなくなる、の意。

西山や扇落しに行月夜

㊦ 七番日記(文化10・5)・志多良・句稿消息・文化版発句集

▽ 全集本(発句篇)、志多良を希杖本句集と誤る。

注 西山、京都の西山。嵐山・愛宕山などがある。

解 西山の月はいかにも早く移り、ゆっくりと賞する間もないほどだ、の意。

夕暮の腮につゝぱる扇かな

㊦ 七番日記(文化8・6)・我春集・稿本発句題叢・希杖本句集

▽ 発句鈔追加、中七「腰につゝぱる」。

解 夕暮時、閉じた扇を腮の下に当てて、一日を静かに回想する、の意。

乙松や今年まつりの赤扇

㊦ 七番日記(文化7・6)・稿本発句題叢・希杖本句集

▽ 発句鈔追加、上五「乙松が」。

解 ま新しい祭の団扇を手にした乙松は、いつもとちがってはなやいで見える、の意であろう。

小座頭の天窓へかぶる扇かな

㊦ 八番日記(文政2・2)・希杖本句集

▽ 八番日記(文政2・閏4)、中七「天窓にかむる」。おらが春、中七「天窓にかぶる」。

注 座頭、ここでは盲人の幫間。

解 客席に出た年少の幫間、それがちよいと扇を頭に載いてこれから芸をはじめようとする。

▼ 勝峯『評釈おらが春』に、「こどもの癖に才はちけて、大人より勤がき、人の顔色をよむことも早い。伶俐の性質のも

のが、仕込まれて小座頭となつたのである。小生意気にもへ、ら笑つて、酔つた客の翩りものになり済ましてゐる。(中略) その扇をちよこんと天窓の上に据ゑるのは、いざ踊る用意とも見えるし、ほんの座興の所作のやうでもある。「かぶる」で、天窓をはづれて、顔のかくれる大きさを現はしてゐる。川島『おらが春新解』に、「座頭すなわち盲目で坊主頭の幫間である。幫間は今の万歳のように、自分の頭をチョイと扇でたたく仕草をするが、『かぶる』という語に、目あきの真似をしなからも、どこか見当がちがって、開いた扇をバサリと頭にのせているようになかつこうが目に浮かぶ。求めて人のなぶり者になろうとしている少年座頭の間のぬけた哀れさ」。

他の人の見るも恥し夏ざしき

㊤ 八番日記(文政2・7)

▽ 中七「見る(も)はづかし」。全集本(嘉永版発句集)、上五「田の人の」と誤る。

解 戸を開け広げた夏座敷は、外部から内の様子がよく見える。乱雑なその様子が恥しいのである。

独楽坊を訪ふに錠のかゝりければ、三界無安といふ事を

蠅よけの草を釣して扱どこへ

㊤ 句稿消息

▽ 句稿消息、前書「独楽坊を訪二錠のかゝりて」。七番日記(文化12・6)、前書「独楽坊を訪ふに不逢」。座五「又どこへ」。杖の竹、中七以下「草もつるして扱どこえ」。文政版発句集、中七「草も釣して」。

注 独楽坊、信州上高井郡小布施町六川の梅松寺住職・知洞。

解 梅松寺に知洞を訪ねたが留守、蠅よけの草がつるしたままになっている。いったいどこへ出かけたのだろう、の意。

蟬鳴や天にひつつく筑摩川

㊦ 志多良・句稿消息・文政版発句集

▽ 七番日記（文化10・6）、中七以下「空にひつゝく最上川」。稿本発句題叢、中七「空ニひつゝく」。希杖本句集、中七「空にひつゝく」。「蟬の声空にひつゝく最上川」。

解 炎暑、身を焼き焦がすような蟬の声。その蟬の声のかなたに、天と一つになって見える筑摩川がある。眼前が朦朧とするような炎暑のさまである。

▼ 句稿消息、成美の評に「或は夕涼み、或は夕立、或は霞霧などは思ひよるべきを、鳴く蟬の形容炎熱見るがごとし」。

ねがはくは念仏をなけ夏の蟬

㊦ 文政版発句集

解 あたり全体をおおうような蟬時雨。できることなら、蟬よ念仏を唱えてくれ、の意。

豊年の声をあげり門の蠅

㊦ 文政版発句集

▽ 文政句帳（文政7・夏）、座五「草の蠅」。

解 暑い日が続き稲の実りもよさそうだ。急に増えた家の蠅の声にもそれが感じられる、の意。

蠅一つうてば南無あみだ仏かな

㊦ 七番日記（文化11・11）・句稿消息・文政版発句集・発句鈔追加・希杖本句集

▽ 文政句帳（文政7・夏）、「蠅を打つ度になむあみだ仏哉」。

解 ひとりいて、口をついて出るのは念仏ばかりである。身にむらがる蠅を打っても、口をついて出るのはまた念仏である。

世がよくばもひとつとまれ飯の蠅

㊤ 八番日記(文政2・4)・おらが春・文政版発句集

注 世がよくば、豊年で米価も比較的安ければ。

解 今年は豊年とて米価も比較的安い。さあ、どんどん来て生まれ。飯の蠅たちよ、の意。

▼ 勝峯『評釈おらが春』に、「米価が経済の基準で、財政をも支配した江戸時代には、米相場の変動が社会的の一喜一憂であつた。世がよいとは米価の下落した意味である。(中略)飯の蠅は追つても払つても、執拗にたかつて来てうるさい。その蠅に向つて一茶は相談するのだ。折角だがこの飯はお前にやれない。米一舂が何百文すると思ふ。一粒だつて粗末にされないのだ。今に米が下つて世がよくなつたらば、お前とそれからお前の倅なり、もう一ぴき、食べにやつて来るがい。さうなつたら飯は惜しまない。食べさせてやる。それまでは我慢してくれ、この一粒もやる訳には行かないのだ。蠅はぶんと合点して飯から去つたか何うかは知らない。一茶を理解するには、この句なぞからよく含味してかゝらねばならない」。川島『おらが春新解』に、「この『よくば』を、よくなつたらばという解釈もあるが、そうではあるまい。この軽い調子は『ソウかい、お前たちは豊年なのかい、そんなら、も一つ来てとまりナ』と、手をおいて飯の上の蠅を見やっているような、屈託のない不精たらしい様子が眼前する」。

侍に蠅を追せる御馬かな

㊤ 文政版発句集

▽ 七番日記(文化13・6)・文政句帳(文政7・夏)、中七「蠅を追する」。

解 「侍」(ここでは下級武士。上司の馬なるがゆえに)である。

やれうつな蠅が手をすり足をする

④ 梅塵本八番日記(文政4)・真蹟・文政版発句集

▽ 風間本八番日記(文政4・6)、上五「やれうつな」。関清水物語(二篇)、中七「蠅は手をすり」。花鳥文庫、「それうつな蠅は手もする足もする」。

解 打ち殺すのはよせ。打たないでくれ、打たないでくれと蠅が手をすり足をすっているではないか。八番日記(文政2・5)に、「縁の蠅手をすり足を打れけり」。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「この句の面白さは『手をすり足をすり』といふ重ね言葉の面白さと、蠅の手をすり足をすり様の面白さと、更に手をすり足をすり人間界に於ては、平あやまりにあやまつたり、何か頼み事を頻りにする時の動作である所から、蠅に此心あるかの様に感じさせる面白さにある。かふいふ風に擬人化して見る余裕が生じた時、『やれうつな』との慈悲心も時としては起つて来るであらう。ともかくも一茶は虫も殺さぬといふ程の仏性を持った人でもなかつたが、動物愛といふ点に於てはその句三昧が自然、常人以上のものにならしめたといふ事だけは言ひきれると思ふ」。穎原『俳諧名作集』に、「蠅を叩かうとする。蠅は打たれるとも知らずに、しきりに前肢や後肢をすり合せて居る。それが一茶の目には、手をすり合せて命乞するやうに見えたのである。これも弱者に対する彼の同情であつた。『やれ打つな』とあわたゞしく制して、『手をすり足をすり』と、蠅のいぢらしい有様を訴へて居る時、一茶の心は全く小動物への純な愛情で燃えて居たのだ」。暉峻『名句の鑑賞』に、「例の一茶の動物愛と言つてしえまへばそれまでですが、どのやうに動物を愛してゐても、愛情だけでは詩になりません。愛情から出発した観察が必要なのです。手をすり足をすり蠅の習性が、愛情をもつて取上げられたところに、この句が生れたのです」。栗山「古典名句評釈」に、「蠅は一匹でもまことにうるさいものだ。所きらわずとまるし、手で追い払ったぐらいで逃げるものではない。我慢できなくなり、蠅叩きを持ち出して一打ちしようとする、それとも知らず、蠅は無心に前肢や後肢をすり合せている。まるで手をすり合せて命乞いをしているように思われ、はつと心を打たれるという句意である。『やれうつな』は、他人に呼びかけたものではなく、自分の心に言いきかせているのだ。『やれうつな』と強く注意を喚起し、つづけて蠅の動作を『手をすり足をすり』と巧みに叙してゆく手法は、単純だが、あざやかな展開というほかはない」。川島『一茶集』に、「蠅の習性がおもしろく捕えられている」。中島『小林一茶集』に、

「とまっている蠅を、誰かが蠅たたきで打とうとしているのを、傍から制止して、『やれ打つな』と言ったのであろう。まあ、こうして手をすり足をすり合わせて拝んでいるのではないか、とおどけたのである」。加藤『秀句』に、「蠅のしぐさを巧みにとらえて、人間と同じような解釈を施した発想である。一茶には常套的な手法だが、口語的な呼びかけの表現が人のよるこぶところとなって、きわめてひろく人の口にもてはやされている。(中略) 蠅のしぐさを人間くさくとらえたところはなかなかおもしろいが、句としてはそれだけのものである」。宮本『大観』に、「蠅はものにとまって、前肢や後肢をすり合わせるしぐさをよくする。蠅たたきをもってうるさい蠅を打とうとすると、蠅がしきりに手足をすり合わせるのを見て、人間が手をすり合わせて命乞いをしているさまにみ立て、はっとして、打つのを思いとどまったというのである。(中略) なお、とくに弱者に対する同情の念というより、もっと軽く解して置くべきであらう」。丸山『秀句選』に、「『やあ、その蠅を打ちなさるな。ああして手をすり足をすり合わせて、こちらを拝んでいるではないか』という意。(中略) この句に限らず、一茶は小動物を好んで句によんでいるが、それらを単純に愛憐の情とか、童心の流露といったものだけで理解するわけにはいかない。特に蚊・蠅・蚤など、人間にとってむしろ嫌悪の対象となるようなものをごとさらに選ぶところに、一茶の屈折した心理が感じられ、しばしばそれは彼自身の非力感や劣等感の転嫁であり、仮託である場合の多いことは、改めて言うまでもなからう」。金子『一茶句集』に、「单刀直人に言つて、この句を『慈悲の句』とする通説に反撥する。手を擦り足を擦つて嘆願しているではないか、可哀相だ、打つのを止め給え——という受け取り方を間違いとし、一茶に合わないと見る。それではどう受け取るのかと言えば、まず、手を擦り足を擦る動作はまったく蠅の自然な生態であつて、一茶はそれをそのまま見ているということ(嘆願と見るのは読む者の独断である、ということ)。次に、それでは『やれ打な』は、となると、これは制止の言い方には違いないが、〈打つなよ打つなよ、まあ御覧よ、手を擦ったり足を擦ったりして、気持よさそうにしているじゃねえか。〉といったていどの、ごく軽い言い方で、極端に言えば、『蠅が手をすり足をする』の枕のようなもの(味付け、あるいは弾みを付けるための詞と言つてもよい)と受け取る」。前田『一茶の俳風』に、「やあ打つまいぞ、蠅が手足をすつて命乞いをしているから」。

まゝつ子や昼寝しごとに蚤拾ふ

㊤ 八番日記(文政2・6)

▽ 金集本(篇句篇)、この句を「蚤」「昼寝」双方に採る。

解 夏季、農民は午睡をとる。その傍で継子は衣服をぬいで、確かにいるはずの蚤をさがしている。

蚤の跡かぞへながらに添乳かな

㊤ 七番日記(文化15・4)・おらが春・某あて書簡(文政4・6・13付)・文政版発句集

▽ 発句鈔追加、おらが春第12話(異同あり)を引き、中七「かぞへながらも」。

解 あたかも幼児の蚤のあとをかぞえるかのように、その体に手をやりながら添乳をする母親である。人間本来あるべき姿を目の当たりにして、一茶の心はおだやかである。さと女出生直前の作。

▼ 川島『新釈』に、「母の乳房にすがりながら、腹がけ一つで手足をバタ／＼させて居る子供。手枕をして乳房を嘸ませながら、『オ、斯んなに螿されてまア。』といふ風に、蚤のあとを搔いてやりながら一つ二つと数へて居る母。母と子との交渉が涙ぐましいまで真実に迫つて居る」。勝峯『評釈』に、「片手を枕に片手で乳房を含ませながら、柔かいわが子の肌をさすり／＼、お、お、家のいゝ子を蚤がこんなに食べてねと、蚤の迹を尋ねつゝある、全身の愛を子に注いでゐる母のやさしさ美しさは、人情美の極致であり、又この一句は俳句が表現し得る人情美の極致を代表的に詠んだと評して差支ない名句である」。暉峻『名句の鑑賞』に、「まだ若い母親が、片手を枕にし、片手で腹掛一つの子供に乳房を含ませながら、『うちのお宝をこんなに食べてねえ』と、蚤のあとをおさへるやうにして数へてゐる。文句なしに頷かれる美しい母の愛情であります」。勝峯『評釈おらが春』に、「一茶は『祝、菊女』の勿体振つた題で、『涼風や何喰せても二人前』の句に、その若妻の健啖をからかつてゐる。それだけ又健康でもあつた菊女は、小まめにはたらき、こどもの面倒もよく見てやる。泣く子をすかしつゝ乳房を口にくくませて添ひ寝をする。むづ痒がる肌にはぼつり、赤いふくらみがある。蚤である。憎いやつだ。又ぼつり、いた／＼しく腫れてゐる。ちよつと寝せつけて置いたのに、いくつ喰つたのだらう。背中からずつと撫で、擦すつて、口を尖らしながら、かぞへ立てる菊女の添乳ぶりを『これは句になるぞ』と、一茶はぢつと眺め入つてゐたのである」。川島『おらが春新解』に、「母の乳房にすがりながら、腹がけ一つで手足をばたばたさせている子、手枕して乳房をふくませながら『一つ二つ三つ四つ、まあこんなに螿されてかわいそうに』と、蚤のあとを撫でてやっている母。俗世における無



風帯の母と子の世界である」。荻原『おらが春新釈』に、「やはりその母の姿であって、乳を与えながら、子供の手足に蚤にくわれた跡を見出して、ここにも、そこにもと数えながら、さぞ痒いことだろうといたわる気持である」。栗山『一茶』に、「夏のことだから幼子はおそらく腹がけ一つで寝ころんでいるだろう。母親は乳房をふくませながら、小さな裸のからだに点々と残る蚤の食いあとを一つ二つと数えている。『まあ、こんな食われて、かわいそうに……』自分のことのようにつらがる表情、それをあたたかいまなざしで傍観している一茶である」。宮本『大観』に、「添え乳をしながら幼児のやわらかい肌にも赤く残っている蚤の跡を数えて、かわいそうにと撫でていく情景が目にかんでくる」。

蚤焼いて日和占ふ山家かな

㊤ 文政句帳(文政8・5)・文政版発句集

注 「蚤焼て」、蚤もいっしょに焼いて、の意。

解 大掃除の後、ごみや煤、蜘蛛の巣などを焼いているのであろう。その煙の流れようで、明日の天気を占うのである。

草の葉や世の中よしと蠅さわぐ

㊤ 発句鈔追加・希杖本句集

▽ 発句鈔追加、座五「蠅さはぐ」。稿本発句題叢、座五「草さハぐ」。真蹟、「群蠅や世の中よしと草そよぐ」。

注 「世の中よし」、豊年で米価が安くなること。「世がよい」に同じ。

解 草の葉にも、今年は豊年とばかり蠅がむらがっているよ、の意。

山蟬のたもとの下を通りけり

㊤ 八番日記(文政2・6)

▽ 文政句帳(文政5・6)、上五「山の蟬」。全集本(発句篇)、中七「たもとの中を」と誤る。

解 ジジッ、と音がして、山蟬が袂の下を飛び抜けて行った、の意。道中吟である。  
松の蟬どこ迄鳴てひるになる

㊤ 八番日記(文政2・6)・おらが春・発句鈔追加

解 松の幹で鳴き続ける蟬、いったいどれだけ鳴いたら昼食をとるつもりか、の意。

▼ 勝峯『評釈おらが春』に、「松の樹肌に取りついて、朝から蟬が鳴いてゐる。一つところで、いつ迄も静止してゐるかに見える。やゝ暫らくすると、いつの間にか移動している。鳴きながら脚で、すこしづゝ上へ這ひあがるらしい。蝸牛のやうな緩ろさで、遅々たる運動であるが、遂に松の頂上にまであの歩みで登るのであらうか。朝から昼までの間に、果してどの辺の高さに攀ることが出来ようか。覚束ない、ゆつくりした速度ではないか。『どこ迄』はどの位の位置までゞ高さをつふ」。川島『おらが春新解』に、「喬木の松に鳴きしきっている蟬、それだけに一層圧せられるやうな堪らなさ！ 一体どこまで、いつまで鳴いている気だろう。『どこまで鳴いて昼になる』とは巧妙な言いまわしである。午前中から、ジッとしても汗のふき出すやうなやり切れぬ暑さ、けだるさ。そればかりではなく、内面的に持ちあつかっている悩ましさ、現代人の感覚に生々しく訴えてくる」。

### 新家賀

涼しさや糊のかはかぬ小行灯

㊤ 八番日記(文政3・5)・文政版発句集

▽ 風間本八番日記、前書なし。梅塵本八番日記(文政3)、前書「賀新宅」。座五「丸行燈」。

解 何もかも新しい新築の家である。障子ばかりか、行燈をはった糊さえかわききっていないのである。

春甫京へ行を送る

涼しからん這入口から加茂の水

㊦ 文政版発句集

注 「春甫」、村松氏。長沼（長野市内）住。狩野派の画をよくした。一茶代撰の『董草』がある。

解 這入口まで加茂川の水が流れている京の都はさぞ清々しかろう。

両国橋上

下見てもはう図がないぞ涼舟

㊦ 文政版発句集

▽ 中七「法図はないぞ」。

解 いつまで、下をのぞいて見ても際限がないぞ、涼み舟はつぎつぎに来るのだから、の意。両国橋の上から、通り過ぎる納涼舟に目をうばわれている見物人を邪揄した。

涼しさや笠を帆にした煮売舟

㊦ 八番日記（文政2・8）

解 頭の菅笠に涼風を受けながら漕ぎ行く煮売屋の舟である。

四条河原

涼風に月をも添て二文かな

㊤ 八番日記(文政2・6)

▽ 七番日記(文化9・5)、前書「廿一日 四条河原」。座五「五文哉」。同(15・6)、座五「五文哉」。同(10・5)、上五・中七「涼しさに雪も氷も」。

注 「四条河原」、京の四条河原。陰曆六月七日から十八日まで、納涼のため棧敷を設けた。「二文」はその席料であろう。  
解 四条河原の納涼棧敷、河風に清涼の月を添えて、その席料は二文也、の意。

涼しさや弥陀成仏の此かたは

㊤ 句稿消息・文政九・十年句帳写(10)・文政版発句集・希杖本句集

▽ 句稿消息、前書「日光祭り御役人付といふもの題二分て二百年忌の真似をしたりし時、東本願寺 井」。上五「花さくや」「涼しさや」の両案を記し、前者を朱にて消す。句帳写、前書なし。七番日記(文化12・5)、前書「東本願寺御門迹」。上五「涼しやな」。

注 「弥陀成仏の此かたは」、「浄土和讃に、「弥陀成仏ノコノカタハ、イマ二十劫ヲヘタマヘリ、法身ノ光輪キハモナク、世ノ盲冥ヲテラスナリ」。

解 清々しいことであるよ。弥陀の大悲によって成仏が約束されているこのお方は、の意。手法は『御文章』の文言をふまえた「なむあみだ仏の方より鳴蚊哉」(八番日記、文政2・6)などの等類。

草雫今こしらへし涼風ぞ

㊤ 七番日記(文化11・5)・句稿消息・文政版発句集

解 雫がたれている草の間を通して吹き来る風。これこそ、今作りたての涼風というべきだ、の意。

藪村の貧乏なれて夕涼

㊦ 句稿消息・文政版発句集

▽ 七番日記(文化11・5)、上五「藪村や」。

解 寒村の人々が夕涼みをしている。その生活になれて、表情にも屈託がない。

魚どもが桶ともしらで夕涼

㊦ 句稿消息・文政版発句集

▽ 上五「魚どもや」の誤りであろう。句稿消息・文政版発句集、上五「魚どもや」。おらが春、上五「魚どもや」。座五「門涼ミ」。七番日記(文化9・2)、前書「六道」。「鳴田螺鍋の中ともしらざるや」。ほど拍子(文政7)、前書「地獄」。「夕月や鍋の中にて鳴田にし」。九日集(文政8・序)、前書「地獄」。「夕月や鍋の中にも鳴田にし」。七番日記(文化12・6)、上五・中七「魚どもハ桶としらでや」。八番日記(文政2・6)、「おどる魚桶とおもふやおもはぬや」。

注 「魚ども」、六道(迷界)にあつて、その自覚のない者(凡夫)の比喩。

解 魚どもは食用として捕獲され、桶の中にあるという自覚もなく、屈託のない様で軒先での夕涼みを楽しんでいる、の意。その無自覚の「あわれ」を詠んだ。

▼ 勝峯『名句評釈』に、「これも例の一茶一流の動物への愛の関心である。莊子も言つた通り、誰か魚に非ずして魚の心がわからうぞ。生簀の魚、居る所狭しとは感じて居ようが、明日俎上にのせられようとはまさに夢想しないであらう。あすの運命を知らず盛に遊弋して居る魚に一茶は一掬の涙を注いでゐる」。勝峯『評釈おらが春』に、「此の句の趣向は既に『七番日記』に案じられて、『鳴くたにし鍋とおもふやおもはずや』で田螺は鳴くといふ。田から取られて今は煮られるばかりの鍋の中で、その宿命を意識して鳴くのであらうか、どうか知らんの句から、『八番日記』の「おどる魚桶とおもふやおもはぬや」へ、心理的な連綿を持ち、なほも『おもはずや』の反語に未練を残した上に、『おどる魚』に季語を取落して未定稿である。その季語を人事の『門涼み』と定めて、表現上の転向を試みたのである。『魚どもや』の呼び起しが、桶にとらは

れながら、涼しく泳ぐ運命の儂なさを、無意識と知るが故にいつそう憐愍の情が強い主観がこめられてゐる」。川島『おらが春新解』に、「門涼みとあるので、さかな屋の店頭を思わせる。魚の背にチカチカと反映する灯影など想像されるが、この趣向は、八番日記に『をどる魚桶とおもふやおもはぬや』とあり、なお遡って、七番日記に『鳴田螺鍋の中ともしらざるや 文化九年』とある。これには『六道』と前書があるので、やがて煮られる苦惱を地獄道のそれに擬したのであろう」。

此月に涼みてのない夜なりけり

㊤ 八番日記（文政2・5）

解 天に清涼の月。夕涼みに出てみても人影がない。

人形に茶をはこばせて涼み哉

㊤ 嘉永版発句集初出

▽ 八番日記（文政2・2、5 ㊥重出）・おらが春、前書「人形町」。座五「門涼ミ」

注 「人形」、寛政のころ茶はこび人形と呼んだからくり人形があった。

解 からくり人形に茶をはこばせて、夕涼みがてらの茶を飲む、の意。水茶屋の店先であろう。

▼ 勝峯『評釈おらが春』に、「夏の夕ぐれ外へ出て、すこしでも暑さを忘れようとするのを門涼といふ。その店先で人形が歩いてゐる。それさへ吃驚させられるのに、お茶を淹れた天目を、上り框にでも涼む人の前へ運んでくる。通りすがりにふと眺めてつくづく感心して、しばらくは見惚れる。気がつけばこゝは人形町である。店の看板に嘘はない。あゝさすがは江戸である。人形の給仕で夜涼みの茶をすゝるなんぞ、田舎では夢にも見られない趣向でもあり商売である。一茶は見た昔を思ひ出して再び感嘆しつゝ詠んだのである」。川島『おらが春新解』に、「人形町は昔も今も繁華な町である。その中のある家の店先きに評判の人形がかざってあって、あたりの人気をあつめている。無心の人形はからくり仕掛けのまま天目茶碗をささげて客をもてなし顔である。折から夏の夕ぐれで、涼みがてらの人たちも団扇片手にのぞきこみ、その家の妻や娘など

も風呂上りのゆかた姿で店先きの床几に腰かけてでもいたことだろう。『はこばせて』がこの句の働きで、人形に息が通っている。寛政年代の末には一茶も長期の旅行を終って江戸に帰っていたのであったから、評判の人形は見たであろう。故山に起臥している一茶の目にいきいきと蘇ってくるのは、そうした夏の夜の花やかな江戸下町情調であった。

門涼人の朝がほ咲にけり

㊤ 稿本発句題叢・発句鈔追加・希杖本句集

解 あまりに暑いので外へ出てみる。隣家の朝顔が咲いている。ああ、もう朝顔の季節なんだなあ、の意。

銚子にて

朝涼や汁の実を釣背戸の海

㊤ 稿本発句題叢・文政版発句集・希杖本句集

▽ 発句題叢・希杖本句集、前書「銚子」。七番日記（文化14・6）、上五「涼々や」。

解 夏の朝、涼風を求めて外へ出る。屋並みの裏手に広がる海辺では、朝の汁の実にでもしようというのか、釣人が竿を垂れている、の意。

きのふは鮮魚に宴してけふは松宇仏

夜涼が笑ひ納めでありしよな

㊤ 七番日記（文化13・6）、文政版発句集

▽ 七番日記、前書「七日くとうつり行に」。文政九・十年句帳写(文政10)、前書「同所(注、長沼)松宇の追善」。「夕涼  
 みが笑止仕舞ヲサメ(ルヒママ)と成しかな」。希杖本句集、前書「同所松宇ノ追善」。「夜涼みが笑ひおさめとなりしよな」。

注 松宇、信州長沼(現長野市の内)の名主松井善右衛門。

解 前夜の夜涼みがこの世の笑い納めであったことだ、の意。